

1. はじめに

私は今年度、前橋市立桃木小学校PTA文化部の部長を務めさせていただいた。まさか自分がこのような立場になるとは想像しておらず、これまでPTA活動に積極的に携わった経験もなかった私が部長になってしまったという感じである。こうした状況の中で実施した文化部の事業について、子どもと保護者が参加した取組を中心に振り返りながら、こうしたらもっとよい事業になるのではないかと思ったことを書いてみたい。

2. 平成18年度文化部活動実績

事業名	活動実施日	活動内容
読み聞かせ	平成18年 5月30日(火)	第1回『うさぎのくれたバレエシューズ』 借出：県立図書館より
	平成18年 6月27日(火)	第2回『にゃーご』 借出：県立図書館より
	平成18年 9月21日(木)	第3回『どんぐりたろうの木』 借出：県立図書館より
	平成18年 11月2日(木)	第1回『くまのコールテンくん』 借出：県立図書館より
PTA講習会	平成18年 7月5日(水)	デコパージュ『トトロのシャドウボックス』 講師：山田 幸子先生
PTAバザー	平成18年 10月28日(土)	バザー手伝い 模擬店(串団子、くじ付きおもちゃ)
親子セミナー	平成18年 11月25日(土)	万華鏡作り 講師：大島 修先生、中村 清志先生 (県総合教育センター指導主事)

3. それぞれの活動について

(1) 読み聞かせ

実践の概要と感想

読み聞かせは4回実施した。PTA文化部役員が中心となり、第2校時と3校時の間の休み時間にあわせて学校へ出かけ、図書室で読み聞かせを行った。

使用した本は県立図書館に揃えてあり、こうした活動を行う上での環境整備は整っていると感じた。問題は、読み聞かせを実際に行う我々側にあった。絵本を読むことはできるのだが、読み聞かせるとなると、その技量については心許ないと言わざるを得ない。内心ときどきしながら子どもたちの前に立ったが、やってみるとそのような不安はどこかに飛んでいた。無我夢中でやったからそうなったことも事実だが、子どもたちの真剣なまなざしが我々をしっかりさせてくれたことの方が大きかったように感じる。いずれにしても、やり終わったときの子どもの笑顔とこれまで感じたことのなかった種類の充実感は、「やってよかった」というものを感じさせてくれた。

改善が望まれる点

一つめは、我々の「読み聞かせの力」を向上させることである。そうすれば、さらに大きなインパクトを子どもたちに与えられることになり、より豊かな情操教育につながると考える。

二つめは、子どもの読書活動定着につながる取組にしていきたいということだ。「本を開くと、そこには楽しい世界がある」、こうした思いを子どもに持たせることができれば、子どもの読書量は増えていくのではないか。

三つめは、親子のつながり作りへの活用を推進できれば、ということだ。子どもに本を読み聞かせることのできる時期は、そう長いものではない。小学生のこの時期を逃すと機会を失うことになる可能性が強い。読み聞かせの仕方や注意点を保護者に伝える機会を確保し、読み聞かせの各家庭への浸透を図る取組が期待される。

(2) P T A 講習会

実践の概要と感想

子どもたちは参加せず、先生方と保護者の参加による行事であった。参加者全員が、「デコパージュを作るのは初めて」という状況であったが、講師の先生に乗せられ、楽しいひとときを過ごすことができた。子どもとの時間も楽しいものだが、大人だけの時間もまた違った意義を感じさせてくれた。親同士の、また、先生方との情報交換の場としての機能も見逃すことのできない側面であり、来年度以降、どのような取組になるのかが非常に楽しみである。

改善が望まれる点

より多くの参加者が見込めるような日程での開催が望まれる。

(3) P T Aバザー

実践の概要と感想

P T A本部、広報部、生活指導部、保健体育部、文化部が参加、そして先生方にも参加していただき、2で紹介した中でも最大規模の行事である。近隣の農家が栽培した野菜の直売もあり、桃木小学校に子どもが通っていない家庭も参加するような、地域をも巻き込んだ行事として定着している。文化部としては、バザーの手伝いと模擬店（串団子及びくじ付きおもちゃの販売）を行った。

悩んだのは、模擬店で販売する品のことだった。近場で手配ができ、子どもから大人までが好む品目を扱わなければならない。他の文化部役員との協議を繰り返し、最終的には「串団子」と「くじ付きおもちゃ」を扱うことに決定した。当然ながら、このままでは手配ができるわけではない。それぞれを扱う業者との折衝が必要になってくる。どのくらいの量を仕入れればよいのかもわからない中での交渉だったので、少々難航した。それでも業者とのやり取りを繰り返しながら、仕入れ価格や量を決定し、本番を迎えた。

当日は串団子とおもちゃの配置はもちろんだが、店の飾り付けにも気を配った。たくさんの模擬店が並ぶ中で、少なくとも赤字だけは出ないようにしなくてはならない。どうしたらみんなに購入してもらえるかを考えながらも、みんなでわいわいと楽しく飾り付けを行うことができた。

準備が終了し、バザーがスタートした。串団子とくじ付きおもちゃの売れ行きが気になる。私はおもちゃのコーナーを担当した。幸いにも順調な売れ行きを見せ、完売した。利益もあがり、何とか責任を果たすことができたという充実感を覚えた。

改善が望まれる点

バザーの企画の段階から児童を参加させることができないか、ということである。

今回、私にとっては初めての経験が多かった。にも書いたが、「業者との折衝」では業者とのやり取りの仕方を学ぶことができた。また、「模擬店の飾り付け」では、どうしたらお客さんの目を引くことができるかについてまじめに考えた。こうした「相手」を想定した体験は、子どもたちにとって大きな財産になるのではないか。もちろん、教師をはじめとした大人たちが常に見守っている必要はあるが、子どもたちの自由で柔軟な発想がこうした行事を盛り上げることにもつながると思う。また、それをやり遂げることができれば、大きな自信につながるとともに「職

業観」や「勤労観」の基礎になる部分の育成も期待できるのではないかと考えた。

(4) 親子セミナー

実践の概要と感想

親子で参加し親子で作れる、午前中の2時間(10:00~12:00)でこなしきれる、という条件で検討し、「万華鏡作り」に決定した。文化部でした準備は、行事内容の決定、講師の選定、材料の下準備等であった。講師は、群馬県総合教育センター指導主事の大島修先生と中村清志先生にお願いした。お二方とも「さすが先生」といった感じで、上手に子どもたちを乗せてくださった。

当日は数名の欠席者が出たが、70名を超える参加者を集め、にぎやかに開催することができた。指導をしてくださった大島・中村両先生の展開は非常に巧みであった。まずは万華鏡になくてはならない「鏡」についての説明から始まった。鏡を使って、一つのものが二つに、あるいは三つに移る様子をプロジェクターを使いスクリーンに投影する。その映像を目の当たりにし、子どもたちの興味や関心はくすぐられ、あらゆる場所から子どもたちの歓声があがる。盛り上がった雰囲気のまま万華鏡作りに突入し、親子共々、万華鏡作りに熱中した。製作の合間に、タイミングよく発せられる講師の先生のアドバイスに皆が応える。講師と参加者が一体となるとはこういう状況を言うのか、と私は実感した。

開始から約1時間後、ほとんどの万華鏡は完成した。できあがった自分の万華鏡を一心にのぞき込む子ども、友だちと見せ合って喜ぶ子ども、親子でのぞき合う様子、様々な姿が認められたが、どの顔も輝いていたように思う。ある児童の終了後のアンケートにはこう書かれていた。「まんげきょうづくりはとってもむずかしかった。でも、たのしかった。」、正直な気持ちを書いてくれたものだと思う。そして、最近の子どもの「理科離れ」について思いをめぐらせた。児童の感想は、「理科」が「むずかしい」から「嫌い」なのではないことを知らせてくれた。子どもはやはり子どもであって、いろいろなものに興味を示すことについては昔と何ら変わっていないのだ。変わったのは、「子どもを取り巻く環境」である。我々に必要なのは、「子どもを取り巻く環境」が変わったことを改めて認識し、その上で子どもにどのようにアプローチをするかなのではないかと感じた。

改善が望まれる点

一つ目は、製作に関することである。万華鏡作りは、低学年にはやや難しかった

ようなので、親子で一つの万華鏡を作るというやりの方がよかったかもしれない。また、「親子セミナー」という名前にはそぐわない内容になってしまうが、上級生と下級生とがペアになって何かを作り上げるという形態でもよいのではないか。最近の子どもたちには異年齢間交流の機会が少ない、といった声も聞かれるので、その対策としても有効な手だてとなる可能性を秘めていると思う。

二つ目は、地域の方々のご協力をいただくような形態にするということだ。例えば、近隣のお年寄りで、伝統芸能をはじめとした文化遺産の指導ができる方を講師としてお招きするのである。こうした体験は、子どもたちに文化の継承を促すとともに、異世代交流の活発化にも貢献できるので、やってみる価値は十分にある取組だと思われる。

4. さいごに

1年間の文化部の各事業を振り返ってみた。改めて見直してみると、子どもをめぐる問題として取り上げられているものへの対応策になっていることに気がついた。「読み聞かせ」は、子どもの豊かな情操を育むのはもちろんだが、様々な場面で指摘を受けている「子どもの活字離れ、読書量の減少」に歯止めをかける有効な手だてなのではないかと感じた。同様に、「親子セミナー」における万華鏡作りも、「子どもの理科離れ」をストップする取組になり得る可能性を感じさせる。「PTAバザー」についても3の で指摘したように、子どもの体験を含んだ企画としてリニューアルできるとすれば、最近重視される体験活動の一つとして十分な成果が期待できる取組になるのではないか。学校では普段から、先生方のご指導の下で子どもたちの健全な成長に向けた教育活動が展開されているが、文化部の諸事業が、学校と家庭における日常的な指導と有機的に絡むことによって、さらなる教育効果が期待できると強く感じているところである。

この1年は、文化部の行事に追われるうちに瞬く間に過ぎていった。行事が近づくと、正直なところは胃が痛むような思いであった。しかし、子どもたちの笑顔や、参加された保護者の方々とのふれあいは、いままで味わったことのない感覚（やりがい）を私にもたらしてくれた。他の文化部役員の皆さんとともに、子どもたちの成長を願って各行事を企画・運営してきた中で、私自身が一番勉強させていただいたと、心から感謝をしている。

PTA活動は次代を担う子どもたちの成長に寄与できる、そして、大人たちも成長できる機会である、これらを、身をもって体験することができた1年であった。